2016年11月19日
朝日新聞

北斎一門の1800点幻の絵巻も

すみだ北斎美術館、22日開館

江戸後期の浮世絵師、葛飾北斎（1760～1849）の作品を展示するため墨田区が造った「すみだ北斎美術館」（亀沢2丁目）が開館を前に18日、報道陣に公開された。100年余り所在不明だった絵巻をはじめ数多くの名作が紹介される。

美術館は北斎の作品を集め、門人を含め約1800点を所蔵する。22日に開館すると、まずは約120点が披露される。

開館記念展の目玉になるのが、壮年期の傑作とされる肉筆画「隅田川両岸景色図巻」。両国橋から山谷堀あたりまでの景色、新吉原での遊興の様子が描かれている。海外に流出していた幻の絵巻で、長さ約7㍍の全巻を一挙に公開する。

もう一つ展示の柱になるのが約100年ぶりにカラーで推定復元された大絵馬「須佐之男命厄神退治之図」だ。北斎が晩年、横276㌢、縦126㌢の絵馬に描いた大作。1923年の関東大震災で焼失したが、美術誌「国華」に掲載されていた白黒写真をもとに、専門家の協力で色を推定して復元した。

このほか、肉筆画や版画、版本を展示する。門人の絵をもとに、北斎がこたつに入りながら絵を描いている様子を再現した模型もある。部屋が散らかっても絵に没頭する北斎の姿を垣間見ることができる。

奥田敦子・主任学芸員は「北斎は富嶽三十六景ばかりが注目されるが、多くの作品を描き、多面的な輝きがある。実物を鑑賞してすごみを感じてもらいたい」と話す。

美術館は北斎の作品の収集保存や展示、調査研究を担い、年間20万人の来場者を見込む。菊田寛館長は「年代を超えて気軽に利用できる美術館を目指したい」と話した。

地上4階地下1階建て。延べ床面積は約3300平方㍍。「建築のノーベル賞」といわれるプリツカー建築賞を受けた妹島和世さんが設計した。総工費は約34億円。（黒川和久）

100年以上所在が分からなかった「隅田川両岸景色図巻」の両国橋付近。里帰り後、初めて一般公開される＝すみだ北斎美術館所蔵

門人の絵をもとに、84歳の頃の北斎がこたつに入りながら熱心に絵を描いている様子を再現した模型。傍らで娘が見守っている

葛飾北斎

今の墨田区亀沢付近で生まれ、生涯のほとんどを区内で過ごし、93回も引っ越した。各地から望む富士を描いた「富嶽三十六景」が有名。

ゴッホやモネら海外の画家にも影響を与えたとされる。衣食などに頓着せず、散らかった部屋で作画ざんまいの暮らしだったといわれている。